

《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香（十三） ——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介—和歌を主題とする組香（一）—（『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月）以下、「同一同（十二）」（『社会科学』第49巻第2号、二〇一九年八月）まで、十二回にわたって『社会科学』に掲載している資料紹介の続編である。竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなう。本稿では、書の巻から、牡丹香、和歌浦香、観菊香の、計三つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介」（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに、通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、

矢野 環
福田 智子

「朱」と示し、一面の終わりには「」を付して丁数を記す。考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第46巻第3号）を参照されたい。

一、（2）で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2（角川書店、二〇〇三年）に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《書巻一二四》牡丹香

【翻刻】

△（朱）牡丹香

慈鎮和尚

百首御哥

夏木立庭の野すちの石の上にみちて色こきふかみ草か

な

自_レ李_一唐來_タ世_一人甚愛_ス牡丹_ヲ

永正帝の頃、洛陽に牡丹花老人_名肖柏字夢庵といふ風雅の
隠士あり。具平親王の_{書六六ウ}遠孫にして倭歌を嗜み、春
咲ぬ花や心の深見草といふ牡丹の發句を作り、夫より自ら
牡丹花と称す。他に出るには牛の角を金箔を以て塗り、其
牛に乗て書を読み樂行く。後年撰州呉服里に隠れ、小庵を
縛て夢庵と號す。常に酒香花の三つを愛て、三愛記といふ
書を述し侍る。_{書六七オ}

一 一炷開也。

一 連中の内、二人一組聞べし。

一 酒の香四包、香の香四包、花の香四包、深見艸の香一包_{客香}、

一本香とす。地香、外に拵へ試に出す。客香試なし。

一 酒・香・花の香、都合十二包打交、其内より三包取除、深

見草の香一包加へ十包として、一炷充焚出す。_{書六七ウ}

一 盤は、堅溝二筋。其中に横界十間あり。溝の左右に立物の

穴、横に四つ、豎に十充有。穴数合八十也。

一 立物

牡丹花人形_{乗る} 一 牧童人形_{引く} 一

葉牡丹 八本

蒼牡丹 八本_{白紅四}

開牡丹 八本_{白紅四}

銀短冊 四枚_{認る}

牡丹枝 二つ

赤短冊 四枚_{認る}「書六八オ」

竹鞭 一本

三愛記 一冊

葉牡丹 一本

花壇三鏝_{盤の四間目・七間目・十間目に置く}

一 葉牡丹一本に聞人壹人充也。牡丹花人形と牧童人形とに一
人充付て、人形二つは組合にて聞べし。

一 盤の溝に人形を置き、左右の穴一間目に葉牡丹を立て、各
聞人の札を一枚充、其下に置べし_{始一炷通し札を取替べし}。

一 人形牡丹共に客香聞は二間進む。尤地香聞は_{書六八ウ}一間
進也_{各組間の差別なし}。

一 人形牡丹ともに十間目に至れば、香は残りても其人は聞不
及勝也。

一 牡丹進退左のごとし。

一 〇(朱)四間目に至りて後に、一炷聞は蒼牡丹を五間目に
立て_{充立る}、其葉牡丹は三間目に退き立直す_{進退なし}。是よ
り間に順ひ、蒼牡丹斗を進むべし。_{書六九オ}

一 〇(朱)七間目に至て、其次の一炷を聞は、開牡丹を八間

目に立て_{花色は、蒼の如し}、又其蒼牡丹は六間目に退き立直す_{是も香終る迄}

進退なし。是よりは開牡丹斗り進むべし。十間目に至ると、短

冊を附て勝を定むる也。

冊を附て勝を定むる也。

冊を附て勝を定むる也。

冊を附て勝を定むる也。

冊を附て勝を定むる也。

一 人形の進、左の如し。

○(朱)牡丹花と牧童の間一間おくる、は構なし。」書六九
 ウ二間違と進たる方より助けを付て二間隔ぬよふに進
 む也。たとへば牡丹花一炷間、牧童間違ゆると牡丹花
 斗一間進む。又其次の出香、是も牡丹花斗り聞て、牧
 童不聞時は、牡丹花斗進みては二間おくれに成る故に、
 助を付て、牡丹花の中りたるに准し、牧童も一間付て
 進すべし。牡丹花は二炷目も聞たる故に勿論一間進て
 始の進と」書七〇オ都合二間の進に成る也。

○(朱)客香も是に準し、二間の進故に聞たる方一間進み、
 不聞方に一間助を付て双方一間充進むべし。とかく人
 形と人形との間を二間違ぬ様に進退すべし。

○(朱)牡丹花五間目に至ると、牛の角に牡丹枝を付る。
 又八間目に至ると牡丹花に書物を持する。」書七〇ウ十間
 目に至ると此方へ向けて直すべし也。」是勝。

○(朱)牧童八間目に至ると、竹鞭を持する。十間目に至
 ると此方へ向け直すべし也。」是勝。

○(朱)人形二つとも此方に向る時は、人形の溝を双方
 入替て置べし故牛の綱捻れる。
故牛の綱捻れる。

一 札数一人前拾三枚、十人分百三十枚也。

札表牡丹の異名也」書七一オ

富貴花 一捻紅 牛家黄 葉底子 左紫 王版白 鹿韭

鼠姑 木芍薬 花王

札裏

酒 四枚 香 四枚 花 四枚 深見草 一枚

一 記録は中り斗を記す。」書七一ウ

牡丹香之記香花除(朱)

〔表〕」書七一オ

〔図〕」書七一ウ

〔図〕」書七一ウ

〔図〕」書七一ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

酒	香	花	深見草	
		4	12	1
		12	3	
		9	9	
	+			
		1		= 1 × 10

* 本香には、地香「酒」「香」「花」の香、各四包計十二包から
 三包を除き、客香「深見草」一包を加えて、計十包を用いる。地
 香のみ試香を行ふ。盤物である。

盤は、豎溝が二筋、横界が十間あるものを用いる。豎溝の左右には、立物を立てるための穴が、横に四つ、豎に十ずつある。穴の数は、全部で八十である。

立物は、牛に乗った牡丹花人形と綱を引く牧童人形を一体ずつ、葉牡丹八本と、荅牡丹と開牡丹（咲いた牡丹）を、紅白四本ずつ用意する。また、銀と赤の短冊を四枚ずつ、銀には「大白」、赤には「緋龍」と書いておく。他には、牡丹の枝を二枝、三愛記を一冊、竹鞭一本を用意し、三鏘の歌壇を、盤の四間目・七間目・十間目に置く。

まず、十人の連中を二人一組にする。そして、牡丹花人形と牧童人形とに一組二人を一人ずつ付け、この二人は香を聞くにあたり、組み合わせて盤上を進む。他の四組八人は、それぞれ葉牡丹一本に一人ずつ付く。

盤の豎溝に牡丹花人形と牧童人形を置き、左右の穴の一間目に八本の葉牡丹を立て、その下に、それぞれに付いた連中の札を一枚ずつ置く。本香が始まると、香を聞き当てるたびに、打った札に取り替えていく。

札は、一人分十三枚で、十人分百三十枚を用意する。札表には、牡丹の異名を、また、札裏には、各四枚の地香「酒」「香」「花」と、一枚の客香「深見草」の香名を記す。一炷開きで香を聞く。

牡丹花人形・牧童人形も葉牡丹も、独り聞きか二人以上聞き当てたかに関わらず、客香を聞き当てる時二間、地香は一問進む。十間目に至ると、本香が残っていても、その人はその後の香を聞くまでもなく「勝」となる。

ただし、牡丹花人形と牧童人形は、常に二問以上間を置かないようにする。たとえば、牡丹花だけが地香一炷を聞き当て、牧童が聞き違えると、牡丹花だけが一問進むが、さらに牡丹花が地香一炷を聞き当て、牧童が聞き違えた場合、牡丹花だけが合計二問進み、牧童が二問遅れることになるため、牧童が牡丹花の助けを得るということで、牧童も一問進む。また、客香を聞き当てたことで、両者が二問以上離れる場合には、双方一問ずつ進む。牡丹花人形が五間目に至ると、牛の角に牡丹の枝を付ける。また、八間目に至ると、『三愛記』の書物を持たせる。十間目になると、人形の方向を進んできた方向に向け直し、「勝」となる。また、牧童人形は、八間目に至ると鞭を持たせ、十間目になると、やはり人形の方向を進んできた方向に向け直し、「勝」となる。なお、人形がふたつとも十間目に至り、向け直すときは、人形を置いている溝を双方入れ替えて置き、牛の綱が捻れることのないようにする。

葉牡丹は、四間目に至り、さらに一炷聞き当てると荅牡丹を五間目に立てる。このとき、紅白の荅牡丹を一本ずつ交互に立

てていく。また、葉牡丹は三間目に立て直し、組香が終わるまで進退なくそのまま立てておく。さらに、七間目に至り、さらに一炷を聞き当てるのと開牡丹を八間目に立てる。やはり蒼牡丹の場合と同じように、紅白の開牡丹を一本ずつ交互に立てていく。また、蒼牡丹は六間目に立て直し、これも組香が終わるまで進退なくそのまま立てておく。これ以後は、香を聞き当てるのと、開牡丹だけを進める。十間目に至ると、短冊を付けて「勝」とする。

記録には、聞き当てた場合のみ香名を記し、最下段には、すべて聞き当てることと「皆」*、それ以外は聞き当てた炷数を記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、慈円『拾玉集』第二、二二二二二番に載る。

(詠百首和歌)

(夏十五首)

夏木だち庭の野すぢの石のうへにみちて色こきふかみ草かな

この歌の「ふかみ草」(牡丹の異名)から、後に「花咲かぬ花や

心の深見草」という発句を詠んだ牡丹花肖柏のエピソードを想起し、構成した組香である。慈円の歌を発端としながらも、「酒・香・花」を好んで『三愛記』を書き、また、角に金箔を塗った牛に乗るといった奇矯なふるまいをした肖柏のほうに、組香の素材が求められている。肖柏が具平親王の末裔であることや、牛の角を金箔に塗ったことなどは、『和漢三才図会』「和泉」の項にも掲載されている。

札表に記される十の牡丹の異名は、江戸期の文献にほぼ見出される。たとえば、前掲の『和漢三才図会』には、「牡丹」の項に、「牛家黄」「王版白」「鹿韭(ろくきゅう)」「鼠姑(そこ)」「木芍薬(もくしゃくやく)」「花王」といった名称が見え、また、「葉底子」は「葉底紫」のことであろう。さらに、『本草綱目啓蒙』の「牡丹」の項には、「富(富)貴花」が挙げられ、「山茶(ツバキ)」の項には、「牡丹ニモ一捻紅アリ」とある。なお、「左紫」は、北宋の文人、歐陽脩の『洛陽牡丹記』に「左花者千葉紫花葉密而齊如截」という「左花」を指すか。

《書卷一二七》和哥浦香

【翻刻】

△(朱) 和哥浦香

新續古今集

これも新拾遺集えらびはしめられける時續千載集より

五たひの集にあひぬる事を思ひて 頓阿法師

玉津嶋入江漕出るいつて舟五たひあひぬ神やうくら

ん

此哥によつて組たる式也。」書八五ウ

一 二炷開。

一 左方五人、右方五人と分つ左方上座なるべし。

一 和布ワカメの香、濱木綿ハマユウの香、神馬藻ナノリソの香、藻塩艸モシホクサの香、各二包

充外に出す試な香も也、濔標ミラツクシの香二包試な、都合十包出香とす。

一 本香十包打交て五包充左右に分け置き、始に左方より一炷

焚出し、左廻りにして右の方にて」書八六オ 聞止る。又其次

一 炷を右方より焚出し右回りにして左方にて聞止る。二炷

聞終りて札筒と折居とを一つ充左右の聞頭の前に出す時に

聞の通りを札打べし。扱て二炷ともに札打終て後に一炷目

の札を記録の上に並べ、始の香包を一包開き、中りに隨ひ

記録に写し、舟の進退有る也。又二炷目の札を出し香包を

開き、記録、舟の進退前のごとし。如此三炷目」書八六ウよ

り十炷目迄二炷充一同に左右へ廻す。其例前に準知べし。

一 盤は一面に海の蒔絵有て、其上に豎界五筋、其界中に溝二

筋宛、都合十筋有是舟を遣る道也。 横界十筋真中に嶋有砂子地也。 前後二間

目に穴十二有前六後六と穴。有。芦を立てるべし。

立物は

鳥居瑞籬 二銚 芦の葉 十二本」書八七オ

折船十艘 金紙五

一 銚様は嶋の左右に鳥居瑞籬を建て、前後の端に舟を並へ左舟筋道に並べし。、無銘札を一枚充舟の内に入置くべし是は人の乗。是は人の心也。 舟の前

の方に芦の葉六本充立置也。

一 舟の進退は双方の内にて地香独聞二間、二人より一間づ、

進。客香独聞三間、二人よりは二間充す、む。」書八七ウ 五炷

間中ると嶋へ揚る舟は其終にして舟の内の札を船の上に置也。 又其次を聞は嶋を越して向

ふへ六間目也。舟を廻し札を乗る是一炷。 亦其次を聞ば夫よりして客

香地香の差別なく何人聞にても二間充舟を向ふへ進ませ、

互に向ふの岸に着たるを勝とす嶋を越てよりは。聞違ても退事はし。

一 五炷聞て嶋へ揚りて其次の香を聞違たる時は家路に帰ると

いふ心にて札を舟に乗せ其舟を手前」書八八オ に向直す是一炷也。

夫よりは聞に隨ひ一間充元の所へ漕戻すべし。

一 舟を進せて後には聞違の度毎に何人にてても一間充退く也。

もし退く目なき時は其俣に置べし。

一 記録は二炷充並べ、二行に中り斗を記す。

皆中は 左方は哥の上句を書 右方は哥の下句を書

皆外は 五手舟と書」書八八ウ

其外は炷数を認べし

一 札数一人前十一枚拾人分百拾枚也。

札表 古哥の内を
取て用ゆ

磯の松 夜渡月 入江の菖蒲 みがける玉 友千鳥

岩根の薄 芦邊の荻 忘貝 霜の露 海のはまもの

札裏 同レ上

和布 ワカメ 濱木綿 ハマユメ 神馬藻 ナノリソ 藻塩艸 濔標 各二枚充 昔八九オ

ホヅワラ

文字なし 一枚 都合十一枚充也。

札紋古哥

右兵衛督為教

玉津嶋磯邊の松の木間より朧にかすむ春の夜の月

光俊朝臣

和歌の浦の入江にくちし菖蒲草ことしはしめてよにひか

れぬる

民部卿為明 昔八九ウ

和歌の浦にあつめてみかく玉銚の道ある御代は光そふら

ん

後八條入道前内大臣

和歌の浦の跡をもそへよ友千鳥たひかさなれる数にもれ

すは

夫木

源 兼昌

玉津島岩根の薄穂に出て、まねけはかへる和哥の浦浪

従二位行家卿

音そよく芦邊の荻のそれとなく吹まかへたる和哥の浦

風 昔九〇オ

よみ人しらす

和哥の浦に袖さへひちて忘れ貝ひろへといもにわすられ

なくに

従二位家隆卿

和哥の浦や入江の芦の霜の露かゝる光りにあはんとやみ

し

新續古今

この哥、玉津島の御歌となん

とこしへに君もあへやもいさなとり海のはまものよると

さくを

よみ人しらす

和哥の浦に和布かりほす我をみて沖漕舟の過かてにす

る 昔九〇ウ

寂蓮法師

濱木綿のかさなるかすをしるへにて思ひたちける和哥の

浦風

新六帖

民部卿為家

和歌の浦に磯の神馬藻ナノリツそれ斗わつかにかけのあまのさひ
しざ

後京極撰政前大政大臣

新續古今
和歌の浦の契もふかし藻塩草しつまむ世々をすくへとそ

思ふ

法印浄辨

新千載集
いかにせん和歌の浦わの滯標身を立なから浅き心を書

九一オ

和哥浦香記

〔表〕 書九一ウ

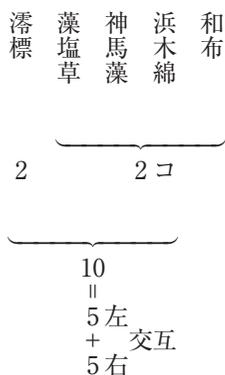
〔表〕 書九二オ

〔図〕 書九二ウ

〔図〕 書九三オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香※には、地香※「和布」「浜木綿」「神馬藻(なのりそ)」「藻塩草」の香と客香※「滯標」の香、各二包計十包を用いる。地香のみ試香※を行う。盤物である。

答えには特殊な札を用いる。一人分十一枚で、十人分百十枚を用意する。札表には、本伝書に列挙されている古歌から取った語句を記す。また、札裏に記す前掲の五種類の香名も、それらの古歌から取っている。なお、一枚だけは、札裏に何も書かない札(無銘)を用意しておく。一炷※開きで香を聞く。

連中は十人を左方と右方に分ける。本香十包を五包ずつ左右に分けて置き、まず左方から右方へ、一炷焚き出して左廻りに香炉を廻し、二炷目は、右方から左方へ焚き出して右廻りに香炉を廻す。二炷聞き終わった後、奇数炷には札筒を、偶数炷には折居を、ひとつずつ左方と右方の間頭(最も上座の人)から廻していき、札を打つ。札を打ち終わった後、一炷目の札を記録の上に並べ、香包を開いて答えを披露する。そして、聞き当った場合のみ答えを記し、盤上の舟の進退を決める。二炷目も同様である。こうして、三炷目以降十炷目まで、二炷ずつ香炉を廻していく。

盤の立物は、鳥居瑞垣を二鏑、芦の葉を十二本、金・銀の折船を各五艘用意する。盤は、一面の海の蒔絵の上に描かれた豎界五筋のそれぞれに溝が二筋、合計十筋あるものを用いる。こ

これは、金・銀の舟五艘ずつを筋違いに置いて進めるための道である。また、横界十筋の中央に砂子地の島が描かれ、盤の前二間目と後二間目に、芦の葉十二本を立てるために、それぞれ穴が六つ、計十二ある。島の左右に鳥居瑞垣を立て、前後の端に舟を並べて、それぞれの舟に無銘の札を一枚ずつ載せる。人が舟に乗っていることの見立てである。芦の葉も、舟の前方の位置にある前述の穴に六本ずつ立てる。

舟の進退は、左方・右方それぞれに、地香の独り聞きの場合には二間、二人以上聞き当てた場合は一間ずつ進む。客香の独り聞きは三間、二人以上では二間ずつである。また、香を聞き違えると、聞き違った人数に関わらず一間ずつ退く。舟が盤の端にあり、退く目がないときは、そのまましておく。

舟が五間目に進んだら、舟を五間目に置いたまま、舟に乗せていた札を島の上に置く。人が島に揚がったことの見立てである。そして、その次の一炷を聞き当てた場合は、島を越えて六間目に舟を廻し、再び札を載せる。そしてこれ以降は、香を聞き違えても退くことなく、香を聞き当てる、客香・地香の区別や聞き当てた人数に関わらず、二間ずつ進む。向こう岸に着いた人が「勝」である。一方、舟を五間進めて島に揚がり、その次の一炷を聞き違った場合は、「家路に帰る」という意味で、舟に札を乗せて、舟を手前に向け直し、これ以降は、香を聞き

当てる二間ずつ元の場所へ漕ぎ戻る。

記録には、聞き当てた香のみを、二炷ずつ並べて二行に記す。すべての香を聞き当てた場合、左方の連中には冒頭の歌の上句「玉津嶋入江漕出るいつて舟」を、また、右方には下句「五たひあひぬ神やうくらん」を書き、すべて聞き違った場合は「五手舟」、その他は聞き当てた炷数を記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『新統古今集』巻第十八雑歌中、一九〇四番に載る。

これも新拾遺集えらびはじめられける時、続千載集より五たびの集にあひぬる事をおもひて 頓阿法師

玉津島入江こぎいづるいつて舟五たびあひぬ神やうくらん

『新拾遺集』は、貞治二年（一三六三）、後光厳天皇の命により、藤原為明が撰者となって編纂が始められたが、為明が病没したため、頓阿（一二八九〜一三七二）が作業を継承し、翌貞治三年に完成した。「五手舟」（櫓が十挺ある舟）から同音反復で「五度（いつたび）」を導きながら、頓阿が初めて勅撰集入集を果たした『続千載集』から数えて五代目にあたる『新拾遺集』

に至り、念願の撰者になれたことを詠む。和歌の浦にある、古
来、和歌の神として崇められている玉津島神社が願いを叶えて
くれたという歌である。

本伝書には、「札紋古哥」として、十四首の和歌が列挙されて
いる。いずれも「和歌の浦」「玉津島」を詠んだ歌、あるいはこ
の地にちなんだ歌である。いま、煩を厭わず、それらの歌につ
いて、集付を手掛かりにしながら、出典の本文を『新編国歌大
観』によって確認しておこう。なお、「和歌の浦（浦浪／浦風／
浦わ）」「玉津島」は四角で囲み、札表の名目（①～⑨）と札裏
の香名（⑩～⑭）には傍線を付した。

①『玉津嶋』磯邊の松の木間より隴にかすむ春の夜の月（夫木・右
兵衛督為教）

②『夫木抄』卷第二十三雑部五、一〇四七七番「たまつしま、玉
津、紀伊／玉津島三首歌合、島春月 右兵衛督為教卿」

③『和歌の浦』の入江にくちし菖蒲草ことしはじめてよにひかれ
ぬる（夫木・光俊朝臣）

④『夫木抄』卷第七夏部一、二六五〇番「昌蒲／家集 光俊朝
臣」「この歌は、続古今の撰者にくははり侍りけるころ、鎌倉中
書王御会に昌蒲をよめると云云」

⑤『和歌の浦』にあつめてみかく玉鉾の道ある御代は光そふらん

（新續古今 民部卿為明）

⑥『新続古今集』卷第七賀歌、八〇三番「延文元年六月内裏に
て、人人三首歌つかうまつりける時、寄道祝言といふことを 民
部卿為明」

⑦『和歌の浦』の跡をもそへよ友千鳥たひかさなれる数にもれす
は（新續古今 後八條入道前内大臣） ⑧『新続古今集』卷第六
冬歌、六七三番「永和百首歌たてまつりける時 後八条入道前
内大臣」

⑨『玉津島』岩根の薄穂に出て、まねけはかへる『和歌の浦浪（夫
木 源兼昌）

⑩『夫木抄』卷第二十三雑部五、一〇四七六番「たまつしま、玉
津、紀伊／永久四年七月忠隆家歌合、薄 源兼昌」、第三句「ま
ねけどかへる」

⑪音そよく芦邊の荻のそれとなく吹まかへたる『和歌の浦』風
（夫木 従二位行家卿）

⑫『夫木抄』卷第十一秋部二、四四九七番「荻／弘長元年百首、
荻 従二位行家卿」

⑬『和歌の浦』に袖さへひちて忘れ貝ひろへといもにわすられな
くに（夫木 よみ人しらす）

⑭『夫木抄』卷第二十七雑部九動物部、一三〇七六番「わすれ
貝／同（題しらす）、万十二 同（読人しらす）」

- ⑧ **和哥の浦** や入江の芦の霜の露かゝる光りにあはんとやみし
(夫木 従二位家隆卿)
 Ⅱ 『夫木抄』 卷第二十七雑部九動物部、一二六一〇番「鶴／寛
喜元年女御入内御屏風 従二位家隆卿」
 ⑨ とこしへに君もあへやもいさなとり海のはまものよるとき
くを (新續古今 この哥、玉津島の御歌となん) Ⅱ 『新続古
今集』 卷第二十神祇歌、二〇七八番「この歌は**玉津島**の御歌と
なん」
 ⑩ **和哥の浦** に和布かりほす我をみて沖漕舟の過かてにする
(古今六帖 よみ人しらす)
 Ⅱ 『古今六帖』 第三、一八七六番「うら」
 ⑪ 濱木綿のかさなるかすをしるへにて思ひたちける **和哥の浦**
風 (夫木 寂蓮法師)
 Ⅱ 『夫木抄』 卷第二十八雑歌十、一三五五番「浜木綿／十題
百首 寂蓮法師」、結句「わかのうら浪」
 ⑫ **和歌の浦** に磯の神馬藻(ナノリソ)それ斗わつかにかけるあ
まのさひしき (新六帖 民部卿為家) Ⅱ 『新撰六帖』 第三帖、
一一三三番「なのりそ」(為家)、第四句「はつかにかける」
 ⑬ **和歌の浦** の契もふかし藻塩草しつまむ世々をすくへとそ思
ふ (新續古今 後京極摂政前大政大臣) Ⅱ 『新続古今集』 卷第
十九雑歌下、二〇二九番「歌合し侍りけるついでに、前大僧正

慈鎮もとによみてつかはしける 後京極摂政前大政大臣」

⑭ **いかにせん** **和歌の浦** の濔標身を立なから浅き心を (新千
載集 法印淨弁)
 Ⅱ 『新千載集』 卷第十七雑歌中、一九九一番「題しらす 法印
淨弁」

①の「磯邊の松」を「磯の松」、②の「入江にくちし菖蒲草」を
「入江の菖蒲」、③の「みがく玉銚」を「みがける玉」というよ
うに、和歌に詠まれた語句を札表の銘として言い換えることは
想定し得る。また、④⑭は、和歌からそのまま語句を採って
いる。そうすると、札表のふたつ目「夜渡月」のみ、依拠する
古歌が見当たらない。そこで、『新編国歌大観』を検してみると、
次の一首を見出す。

うへのをのことも、海辺月といへる心をつかうまつり
けるついでに 御製

わかのうら あし辺のたづのなくこゑに夜わたる月のかげ
ぞひさしき 『新勅撰集』 卷第四秋歌上、二七一番

おそらく本書は、この一首を書き落としてしまったのであろう。
これが「和歌の浦」の歌であることも、その証左となろう。

《書卷一二八》観菊香

【翻刻】

△(朱) 観菊香

古今集

久かたの雲の上にて見る菊は天つ星とそあやまたれける

敏行朝臣

新撰六帖

垣根なる菊の着せ綿けさ見れはまたき盛の花咲にけり」昔九三ウ

信実朝臣

此哥によつて組たる香也。

一 一炷開。

一 銘々聞也。人数九人に限り。

一 白菊の香、紅菊の香、黄菊の香、各三包試に拵へ、天つ星の香

一包試なし。、地香九包打交、其内より一包取除け、客香を加

へ、都合九包出香とす除たる一包は。」昔九四オ

一 盤は

洲濱形の嶋臺 一つ

立物は

菊九本 白三本 紅三本

各短冊を附る 菊銘札の紋に同じ

菊三本充 一本花九りん 充附る

色を分けて盤の三か所に立る

花垣 三つ 圓菊を 囲ふ

着せ綿七十二 白 廿四 黄 廿四 紅 廿四

星綿九 白三 紅三」昔九四ウ

一 地香聞たるは着せ綿を其菊の花に着する也 白菊の香聞たるは白綿、紅菊の香聞たるは紅綿、黄菊の香聞たるは黄綿と出香の。色に合せて着するべし。

一 記録は中り斗を記す。 白菊の香聞たるは白綿、紅菊の香聞たるは紅綿、黄菊の香聞たるは黄綿と出香の。色に合せて着するべし。

一 札数一人前拾枚、九人分九十枚也。

札表 昔九五オ

武蔵野 住吉 吹上 水無瀬 大井川

戸難瀬 田箕嶋 廣沢

吹飯濱 フケイ

札裏

白菊 二紅菊 黄菊 各三枚充

天つ星 一枚 昔九五ウ

観菊香之記 黄菊除(朱)

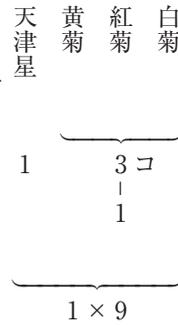
〔表〕 昔九六オ

〔図〕 昔九六ウ

〔図〕 昔九七オ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



*本香には、地香「白菊」「紅菊」「黄菊」の香、各三包計九包から一包を除き、客香「天津星」一包を加えて、計九包を用いる。地香のみ試香を行う。盤物である。

連中は九人に限り、方（グループ）に分けることなく、銘々が香を聞く。答えには、特殊な札を用いる。一人十枚、九人分で九十枚を用意する。札表には、歌枕に由来する八つの銘を記し、札裏には前掲の四種類の香名を記す。一炷開きで香を聞く。盤は、州浜形の島台をひとつ用意する。また、立物は、連中九人に対し一本ずつの菊（白・紅・黄、各三本）に、前述の札表の銘を記した短冊をそれぞれ付ける。菊は一本につき九輪の花が付いているものを用い、盤の三箇所に、色分けして立てて、花垣三つでそれぞれ菊を囲う。さらに、着せ綿を白・紅・黄、それぞれ二十四ずつ、計七十二用意し、また、星綿も同様に、三種の色を三つずつ、計九つ用意しておく。

地香を聞き当てると、香の種類に合わせた色の着せ綿を菊の

花に着せ、客香を聞き当てたときには、星綿を着せる。すべての香を聞き当てた場合は、一本の菊に、残りの綿をすべて着せる。

記録には、聞き当てた場合のみ香名を記し、最下段には、すべて聞き当てると「皆」、それ以外は聞き当てた炷数を記す。

(2) 和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、次の歌集に載る二首である。

寛平御時きくの花をよませたまうける

としゆきの朝臣

久方の雲のうへにて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける
『古今集』巻第五秋歌下、二六九番

(九日)

(信実)

かさねなるさくのさせわた今朝みればまだきさかりの花さきにけり
『新撰六帖』第一帖、六四番

本組香は、陰暦九月九日の重陽の節句の行事に依拠する。九月八日の夜、菊の花を真綿で覆い、香と露とを移して、翌朝にその綿で身を拭うと長寿を保つとされるものである。連中を九人

に限り、本香を九炷とし、菊九本について一本につき九輪の花を付けたものを用いるといった、「九」という数字を多用するのはこのためである。

「星綿」の設定は、『古今集』の敏行歌の「菊」を「あまつほし」と見紛うという発想に拠ると見られる。また、菊を「花垣」で囲うのは、『新撰六帖』の信実歌の「垣根なる菊」に拠るところが大きからう。この信実歌には、早くも咲き誇る菊のさまが鮮明に詠まれており、本組香の盤の鏝の表現世界を規定している。

札表の九つの歌枕のうち、七つについては、『新編国歌大観』により、以下のように「菊」の歌の用例が見出される。歌枕には順に①～⑨の通し番号を付した。なお、当該の歌枕には傍線を付し、菊の名称は四角で囲って示した。

①武蔵野

こないしのかみのすみたまひし時、ふちつぼにてきくの
賀みかどのせさせたまひけるに

紫の一本ぎくはよろづよを武蔵野にこそ頼むべらなれ

『兼輔集』五八番

②住吉

男

雁なきて菊の花 さく秋はあれど春の海辺にすみよしの浜

『伊勢物語』第六十八段、一二五番

(社頭月)

いつはあれどきくの花 さく秋の月神代もきかず住吉のは

ま 『雪玉集』二八七番

名所眺望

住よしは菊の花 咲くあきの花松の色そふはるの山かせ

『雪玉集』二八四四番

③吹上

(冬日同詠百首応製倭歌

正二位行権大納言臣藤原朝臣定房上)

(秋二十首)

秋風の吹上の波のたよりにもちるといふことはしらす菊の花

『文保百首』一四五〇番

④水無瀬

(水無瀬川撰津)

水無瀬川木葉さやけき秋風に鹿の音あらふ菊の下水

大納言

落滝つ菊の下水水無瀬川流をくめる万代の秋

俊成卿女

万代の秋まで君ぞ水無瀬川かげすみそめし宿の[しら菊]

有家朝臣

万代の契ぞむすぶ水無瀬川せきいる庭の[きく]の下水

定家朝臣

この里に老いせぬちよを水無瀬川せきいる庭の[きく]の

下水

家隆朝臣

山風によそにもみちは水無瀬川せきいる宿の庭の[しら菊]

雅経朝臣

庭にうづむ山路の[菊]を水無瀬川ぬれて吹きほす千世の松

風

具親

波風につけても千世をみなせ河嶺の松陰[菊]のした水

秀能

[菊の花]にはふ嵐の水無瀬山川の瀬しらむきりのをちかた

『最勝四天王院和歌』一三二〜一四〇番

⑤大井川

河辺菊花

大井河みせきの浪の花の色をうつろひすつるきしの[白菊]

『拾遺愚草』一五四九番

⑥戸難瀬

おほみのとなせのきく、しろかねをよりてたきにおと

したり、いとたかくよりおつれどこゑもせず

たきつせはただけふばかりおとなせ[きく]ひとはなにお

もひもぞます 『寛平御時菊合』四番

(水岸菊)

おほみがはとなせのたきとみるまでぎきの[しらぎく]は

なさきにける 『為忠家初度百首』四一五番

⑦田箕嶋 用例なし。

⑧廣沢

(秋二百首)

水辺菊

あまつ空うつれる影もひろ沢に星の数そふ岸の[白菊]

『為尹千首』四六六番

⑨吹飯濱 用例なし。

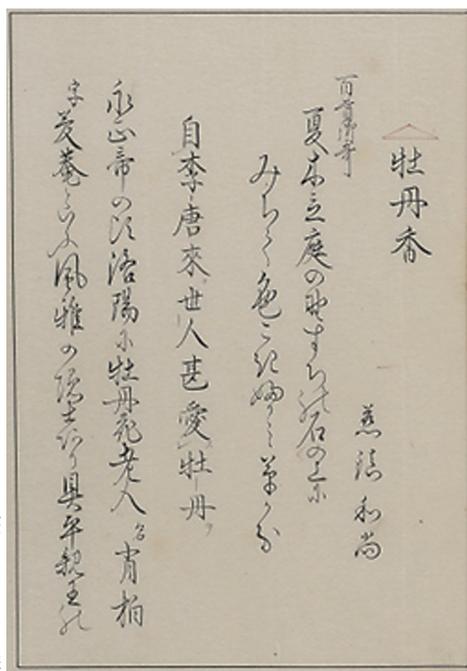
注目すべきは、④水無瀬の菊の歌が、『最勝四天王院和歌』に集中して見られることであろう。このとき「水無瀬」と「菊」とが強く結び付けられたものと考えられる。一方、⑦田箕嶋・⑨吹飯濱には、『新編国歌大観』を検する限り、「菊」との関連性は見出しがたく、数ある歌枕の中から選択された理由は明確で

ない。後考を俟つ。

附記

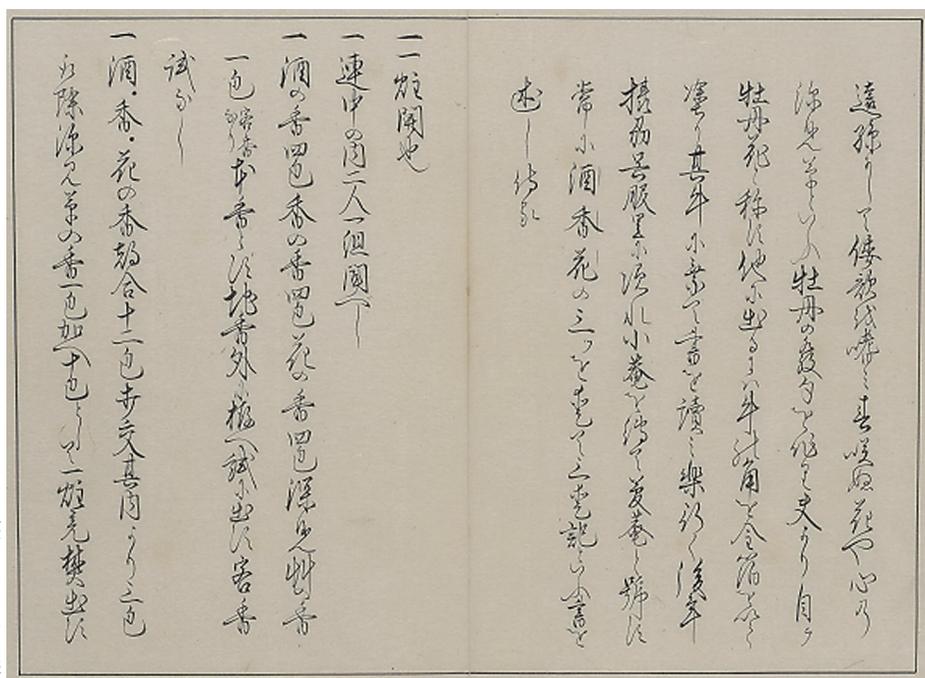
本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究（二〇一六～二〇一八年度）、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469（二〇一六～二〇一九年度））における研究の一部である。

【影印】 綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したものの。

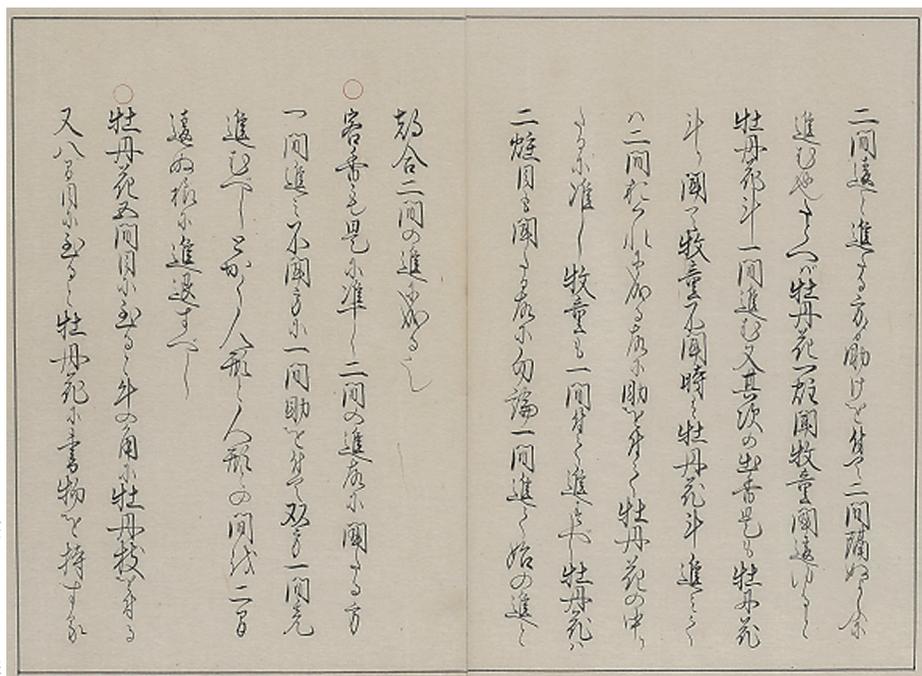


(書・六六丁裏)

(書・六七丁表)

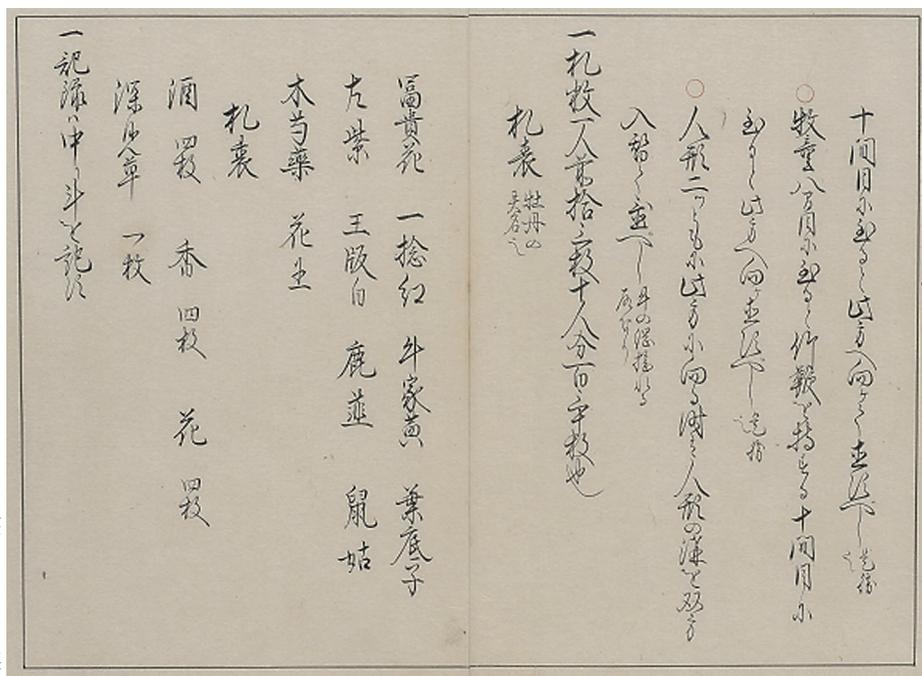


(書・六七丁裏)



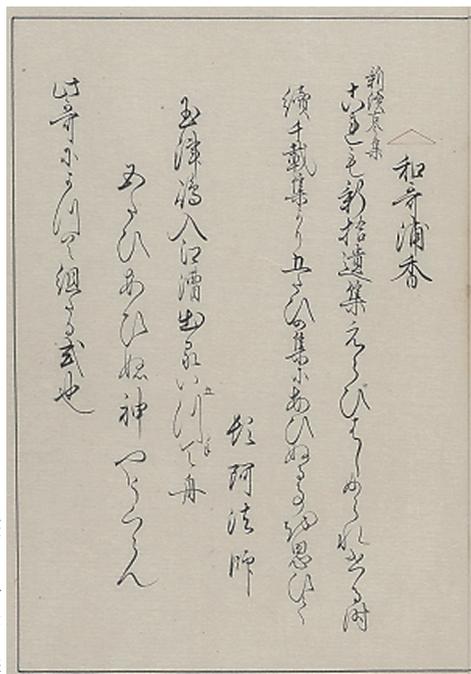
(書・七〇丁表)

(書・七〇丁裏)

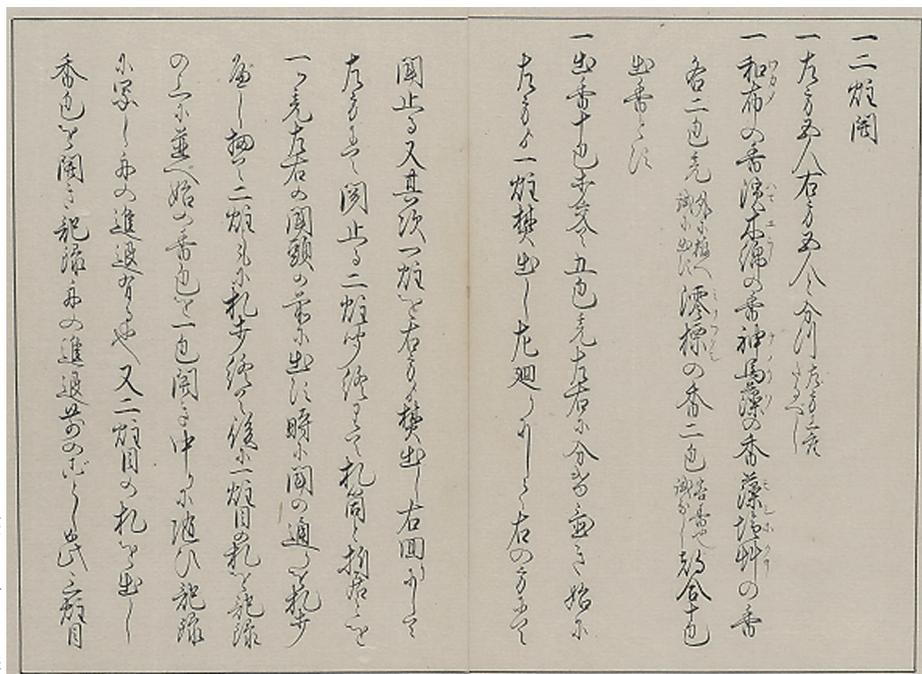


(書・七二丁裏)

(書・七二丁表)



(書・八五丁裏)



(書・八六丁表)

(書・八六丁裏)

<p>一 傍極も清の左右もろろ居瑞羅やと疾く前後の湯小 舟の邊<small>（左の舟船邊）</small>女浴礼して初先舟の内小入 密く<small>（是れ舟の）</small>舟の首の舟小若葉二つ先 立密也</p> <p>一 舟の進退も双方の内も地音律は二回二人より 一 回く進若音律國之音二人より二回先ずむ</p>	<p>一 種も一面も海の時後より其の小は境界を初其界中 小海二船宛初合十船有 觀聽搖界十船真事小 清有<small>（清は）</small>前後二回小宛十二<small>（若くは後二つ宛）</small> 立物</p> <p>ろ居瑞羅 二傍 若の葉 十二</p> <p>折形十般 <small>（金銀五）</small></p>
---	--

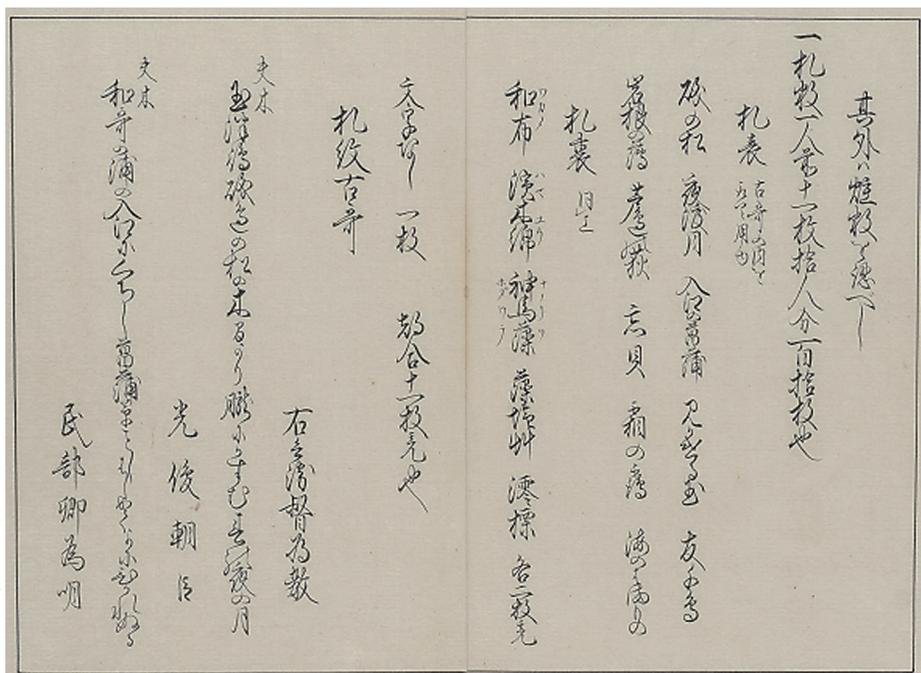
(書・八七丁裏)

(書・八七丁裏)

<p>一 五般國中の清揚<small>（舟の清揚）</small>又其清揚國々 清と織<small>（一つ四つ）</small>也 舟と色一札と赤<small>（是れ）</small> 亦其清揚國々入りて若音律の空列り 何人國々も二回先舟と向ふ（進く）舟小四の 舟小若葉二つ先立密也<small>（是れ舟の）</small> 一 五般國中の清揚<small>（舟の清揚）</small>其清揚の音と軍遠する時 家路小清より心より札と舟小若葉二つ先立密也</p> <p>清希と</p> <p>一 舟と進退も後二回遠の夜毎何人より二回先 退く也り退く内も何れも音律也</p> <p>一 祀儀二般先立密也二舟中舟と親ひ</p> <p>皆中<small>（舟の音律）</small> 皆外<small>（舟の音律）</small></p>	<p>一 五般國中の清揚<small>（舟の清揚）</small>又其清揚國々 清と織<small>（一つ四つ）</small>也 舟と色一札と赤<small>（是れ）</small> 亦其清揚國々入りて若音律の空列り 何人國々も二回先舟と向ふ（進く）舟小四の 舟小若葉二つ先立密也<small>（是れ舟の）</small> 一 五般國中の清揚<small>（舟の清揚）</small>其清揚の音と軍遠する時 家路小清より心より札と舟小若葉二つ先立密也</p> <p>清希と</p> <p>一 舟と進退も後二回遠の夜毎何人より二回先 退く也り退く内も何れも音律也</p> <p>一 祀儀二般先立密也二舟中舟と親ひ</p> <p>皆中<small>（舟の音律）</small> 皆外<small>（舟の音律）</small></p>
---	---

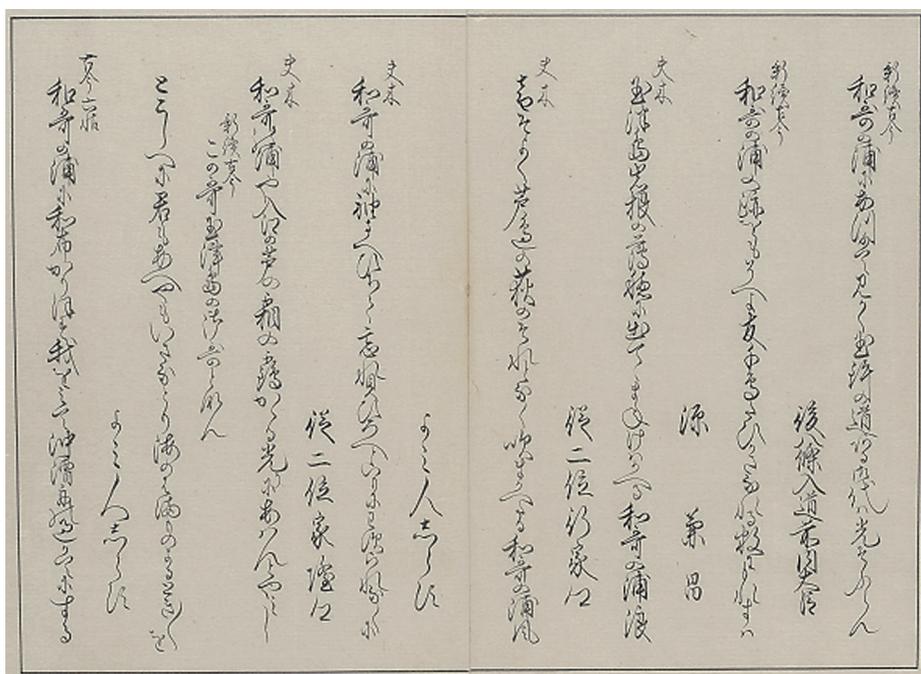
(書・八八丁表)

(書・八八丁裏)



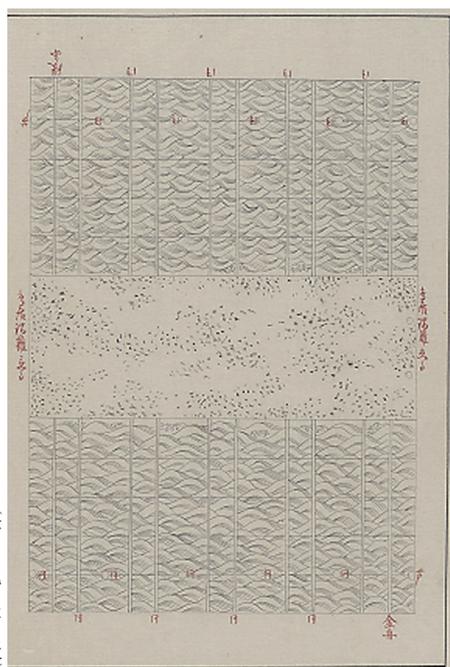
(書・八九丁表)

(書・八九丁裏)

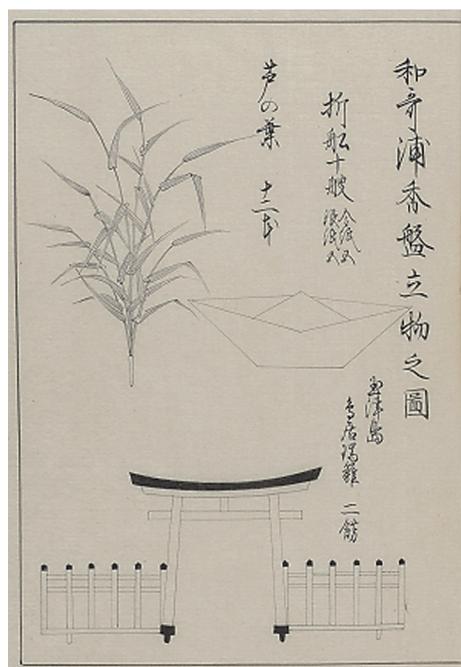


(書・九〇丁表)

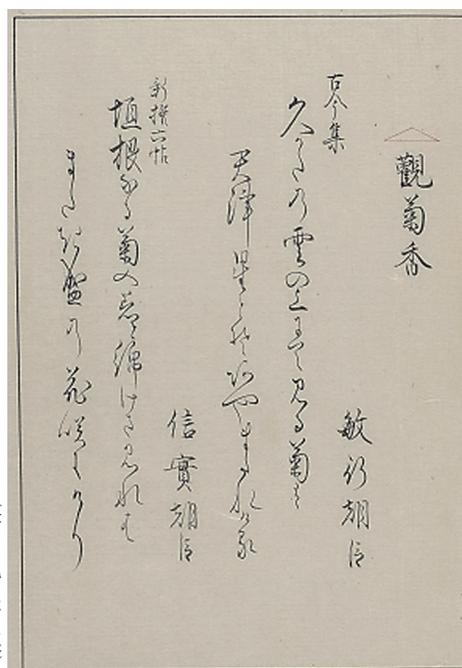
(書・九〇丁裏)



(書・九三三表)



(書・九二二裏)



(書・九三三裏)

此等小丸は組する香也
 一版園
 一落園也人教九人出段也
 一白菊の香紅菊の香黄菊の香香之也外も種
 天津星の香一也諸香也増香九色亦其内
 一色お疎り香香と加へ部合九色出香と以
 階より一色、
 ぬいさ
 一盤
 例 瀨飛の鴻星堂 一
 立物
 菊分白之赤 紅之赤 黄之赤 杏穂冊菊綴札の 紋も同じ
 菊之衣一花九人 先香 絶て分多々盤の二前も香
 花植 二、園人
 总之綿七十二白其四 黄其四 印其四

(書・九四丁表)

(書・九四丁裏)

星綿九白之 紅之 黄之
 一此香園より香綿と母菊の花小丸也白菊の香園より綿は白菊の香園より紅菊の香園より黄菊の香園より綿は出香の色を合さず也 香香園より(星綿と
 总す也皆中の何れ一平の菊も 少ぬ綿はとる香也
 一祀綿の中身と祀以
 一札表一人若松枝九人分孕枝也
 札表
 武氣野 位吉 吹之 水雲深
 大井川 立巻深 回巻深 廣深
 吹版演
 札表
 白菊 紅菊 黄菊 香之枝先
 天津星 一枝

(書・九五丁表)

(書・九五丁裏)

